



TITLE:

<雑録>「蘇州の夜」といふ映畫を
みて

AUTHOR(S):

H・T

CITATION:

H・T.<雑録>「蘇州の夜」といふ映畫をみて. 東洋史研究 1942, 6(6):
468-468

ISSUE DATE:

1942-02-20

URL:

<https://doi.org/10.14989/145754>

RIGHT:

徐々に失つて行つた。何故かと云へば、近世社會の現實は、「經」との調和の限度を超えて乖離して行つたから、と説かれる。それは、先づ市民と「讀書の家」とが交流すること、また中世の貴族の倫理の外にひそんでゐた風習が、倫理の世界にもち來され「經」の批判を受けたこと、更に異民族の勢力の増大などの事情から、現實は「經」にそむく相を提示し、倫理

の確信を失はせることとなつた。そこで王陽明の如きは「經」への復歸の理想を捨てようとしたが、それは倫理の自殺として否定され、清朝の「經學」は、「經」への復歸の最後の努力をなした。がそれも不十分なところへ、西洋文明が襲來し「經」への復歸の倫理は絶望を告白した。しかしそれに代るべき倫理はなほ發見されない。

以上簡単に紹介したが、要するに本論文は、近世の倫理思想として「經」への復歸といふことを捉へ、極めて巧妙に、しかも論旨がわかりやすく表現されてゐる。けれども讀者に用意がなければ、言葉はわかりやすくても、内容はやはり難しいであらう。

〔小畑龍雄〕

「蘇州の夜」といふ映畫をみて

昨年の暮、松竹大船の「蘇州の夜」といふ映畫をみた。佐野周二と満映の李香蘭とが主演であつた。上海の或孤兒院に年若く美しい頑固な排日家の保姆がゐたが、或機會から一日本人醫者の熱烈な獻身的行爲に感じ轉向して急激に日本に接近した、その結果二人の間には熱い戀愛が結ばれたが、彼は女の許嫁の心情を憐んでその戀を譲つてやつた、といふのがそのあら筋である。

元來かういつた現地ロケーションの映畫は、國策映畫と文化映畫とをも兼ねたもので、大陸の正確な現状を内地の人々に知らせるといふことも重要な役目であらう。さうして映畫によつて支那に對す

る認識を深め、支那をよりよく理解する一助ともするところに、所謂の現地ものの一の意義もあらうと私は思つてゐた。しかし、この期待は全く裏切られ全體に支那らしい雰囲気のないものにこの上もなく失望せざるを得なかつた。

全體の筋はしばらく措くとしても、いろんな點で餘りにも非常識なことが多いのが氣にかかる。例へば、今時上海から蘇州へ行くのに、殊に蘇州にチプスが流行しそれを救護に行くといふ場合、悠々と戎克でクリークを漕つて行くやうなものとは絶対にあるまい。立派な急行列車があるのだ。また治療班に治療を受けた老婆が、謝々謝々といつて頻りに頭を下げてゐるが、支那人はこんな禮の仕方はしない筈だ。これは日本式の支那語である。それから自分の戀人を奪はれたと信じた

女の許嫁が戀敵の日本人を狙撃して失敗する、そのあたりの單調さには、全く見るものをして冷汗をかくしめる。この作者のやうな單純な心を以てしては、到底支那人を理解することは不可能であらう。あくまで陰險な執念深い手段を弄するところに彼等の眞髓があり、むしろ全篇の中心はそこに集るであらう。

要するに、かかる映畫は日本人に見せて益なく、支那人に見せて物笑ひの種となる。これを支那語版によつて、我國の眞意を支那の大衆に訴へ、彼等の文化提携を計り東亞新秩序建設に資せんと望むが如きは、實情に最も迂なるものであらう。映畫人は各方面の支那學者支那研究家に協力を求め、當局者はこれに對して適當な指導を與ふべきである。(T・H)